

## 江戸時代の釧路

江戸時代（1603～1867 年）の間、北海道の一部の地域は、封建領主の松前氏に支配されていました。松前氏は、北海道の先住民であるアイヌと独占的に交易を行う権利を有していました。当時、「クスリ」と呼ばれていた釧路川の河口部には、アイヌの村がありました。「クスリ」とは、「渡る道」や「のど」を意味するアイヌ語に由来する、と言われています。松前氏は、「クスリ」を、この地域のアイヌと交易する拠点として使いました。当初は松前氏の家臣がアイヌと直接交易を行っていましたが、商品経済が発達すると、商人が交易を行うようになりました。

「クスリ」の村は釧路の街へと成長し、北海道東部の漁業・交易・交通の中心地となりました。江戸時代の終わりまでに、ニシン・サケの漁獲量とコンブの収穫が伸び、東北地方からこの地方に来る漁民が増えていきました。また、釧路は、北日本とオホーツク海・千島列島をつなぐ主な港ともなりました。